

Title	「騎士の話」における自然と偶然
Sub Title	Nature and Chance in "The Knight's Tale"
Author	浅川, 順子(Asakawa, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.55 (2009.),p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	<p>Chaucer believed, as Dante did, that God's will was shown through Nature. In "The Knight's Tale" he dramatizes astral influences on human beings. It is Phoebus that leads Emelye to the garden to "walketh up and doun"(l. 1052), which starts the story of love and war. Phoebus also guides Arcite to the forest where he meets Palamon and fights with him. The characters in "The Knight's Tale" rarely express their own will. Instead, they are conscious and accept that the seven planets control their fate: Arcite attributes his captivity to Saturnus. Astrological determinism implied in "The Knight's Tale", however, is limited by the existence of chance: In Chaucer's tale the fatal reunion of Arcite and Palamon was realized by chance. Chance is a topic discussed in relation to nature and determinism.</p> <p>For Aristotle, chance is an event which is not intended by any nature. Avicenna, an interpreter of Aristotelian philosophy, believed that there was no room for chance and the free will of man in the physical world. On the other hand, Thomas Aquinas regarded the indeterminism of chance as a spice of nature. Chaucer apparently follows Thomas to suggest a possibility for earthly beings to escape all-embracing determinism and partly break natural causality. Most events of "The Knight's Tale" happen in the grove which birds and animals inhabit surrounded by various trees. Chaucer gives detailed description of earthly life in order to define human beings as a part of it. Palamon complains that while animals can fulfill their lusts human beings must abstain from them and have pain even beyond the grave. The narrator confesses he does not know where the spirit of Arcite will go. These philosophical problems are raised and left to be considered by Chaucer's audience.</p>

Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20091218-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「騎士の話」における自然と偶然

浅川 順子

チョーサー (Geoffrey Chaucer) の「騎士の話」“The Knight’s Tale” (以下 *KnT*) では、重要な場面で「偶然」がプロットの上で大きな役割を果たす。牢を破ったパラモンは急いで近くの森に身を隠す。ちょうどその朝、アルシーテは、「偶然に」“by aventure” (I.1506)¹⁾ その同じ森に向かった。そして、パラモンが「偶然に」“by aventure” (I.1516) 隠れていた藪の辺りを通り、そこで、二人は再会することになる。ここで注目したいのは、この二人の再会が誰の意思にもよらず、まったくの偶然の出来事として描かれていること、そして、話し手である騎士がそのことをあえて強調しているという点である。チョーサーが典拠としたボッカチオ (Boccaccio) の『テセイダ』*Il Teseida delle nozze d’Emelia (The Story of Theseus concerning the Nuptials of Emily)* でも二人の騎士は森において再会し、決闘にいたる²⁾。しかし、そこでは二人の再会は意図されたものとして描かれている。獄中のパラモンは、アルシーテがアテネに舞い戻り、宮廷に仕えてエメリアに近づいていることを聞かされていたし、その彼が森にしばしば通っていたことも知っていた。だから、パラモンはアルシーテに決闘を申し込むという明確な目的のために、牢を破ったのであり、彼を探すために森へ向かったのである。チョーサーはなぜこの個所で、「偶然」を演出しなければならなかったのか。本稿では、*KnT*における偶然の意味をこの作品が示唆する決定論との関係において考察する。

1. 占星学と決定論

『天国篇』 *Paradiso* における占星学について研究した Richard Kay によれば、ダンテ (Dante) は、天体は神の道具であり、神は自然 (Nature) を通して自らの意志を示すものであるから、神の意思は天体の研究によって突き止めることが出来る、と信じていた。一方、人間には自由意志があるため、人間が天から授けられた能力をどう使うかは占星学によって予測することは出来ないと言っていた³⁾。ダンテが占星学へ言及するとき、重点は主に人間の性格に対する天体の影響という問題に置かれている⁴⁾。

ダンテからの影響も見られ、同じく占星学への言及が多い *KnT* ではあるが、そこでは天体によって支配される人間の運命ということの方が強調される。ダンテにとって、神の意思に従って天体が人間の性格に影響を与える様子を具体的に描いて見せることがねらいだったとすると⁵⁾、*KnT* におけるチャーサーのねらいは、天体が人間の運命に影響を与える様子やその運命を人間がどのように受け止めるべきかという議論を、物語を通して描くことにあったと考えられる。

Goodman は『トロイルスとクリセイデ』 *Troilus and Criseyde* について、アリストテレスの自然哲学がその悲劇観の根底にあるとし、人間に与えられた個々の “nature” は運命として働いている (“Our natures draw us to our natural destinations”) と論じている⁶⁾。『トロイルスとクリセイデ』では “nature” にはもう一つの意味、「神的創造物としての宇宙」という意味も与えられている——“O, thow Jove, O auctour of nature” (*TC*, III. 1016)。 *KnT* では、ダンテの場合と同様、後者の意味の nature が重要な意味を持つ。人間の行動に影響するのは専ら天体からの影響であり、決定論が提示されているとすると、それは占星学的決定論である。

KnT において Love と War (決闘) という中心的プロットの原因を作るのは5月という季節でありその太陽である。二人の騎士が同時に愛

することになるエメリアを庭に向かわせるのは、5月（“in a morwe of May” I. 1034）という季節であった—— “The sesoun priketh every gentil herte,/And maketh it out of his slep to sterte,/ And seith “Arys, and do thyn observaunce.” / This maked Emelye have remembraunce/ To doon honour to May, and for to ryse.”（I. 1043-47）。エメリアは太陽に導かれ、庭を散歩したが（“in the gardyn, at the sonne upriste,/She walketh up and doun…” I. 1051-2），そうしなければ、パラモンとアルシーテが彼女を目にすることも、恋に落ちることもなかったはずであり、すべてはここから始まった。アルシーテが決闘の場となる森に向かったのも、5月に敬意を表すため（“for to doon his observaunce to May” I. 1500）であり、それを導いたのは太陽であった。季節（太陽）が地上の世界に与える影響というテーマは、『カンタベリー物語』*The Canterbury Tales*, 「序詩」“The General Prologue”の冒頭においてすでに示されている。4月という季節が小鳥に夜も眠らず歌わせる（“…and the yonge sonne/ Hath in the Ram his half cours yronne,/ And smale foweles maken melodye.” I. 7-9）。同様に、季節に促され人々は巡礼に出かけるようになる（I. 12）。「序詞」の冒頭で示された天文・占星学的視点は*KnT*に引き継がれ、具体的に展開されている。

*KnT*の作品世界において最も影響力の強い天体があるとすればそれはサトゥルヌスである。太陽によって導かれていることに気づかなかった登場人物たちも、サトゥルヌスによる支配は意識する。アルシーテは囚われの身の生活について“Som wikke aspect or disposicioun/Of Saturne”（I. 1087-88）のせいだと述べ、アルシーテもまた“I moot been in prisoun thurgh Saturne”（I. 1328）と自分の不幸の原因を分析する。占星学において森や砂漠、洞穴などがサトゥルヌスに割り当てられた場所である⁷⁾。*KnT*では森が主たる舞台となっていて、まさに、サトゥルヌスの領域において物語が展開していることになる。森はパラモンとアルシーテが最初に決闘した場であり、闘技場が建設された場であり、アルシーテの葬儀が

営まれた場でもあった。しかし、作品世界がサトゥルススだけによって支配されているわけではない。森の中に闘技場が建設されることにより、他の天体が影響力を奮う舞台が導入されている。

天体による支配は、*KnT* 第3部以降、テーセウスによるウェヌス、マールス、ディアーナの祭壇と礼拝所の建設によって、より劇的に展開されることになる。地上では主人公たちが占星学に従って祈りを捧げ、天上では、祈りを受けた神々による代理闘争が繰り広げられる。決闘におけるアルシーテの勝利はマールスによってもたらされ、落馬という思いがけない事故はウェヌスの依頼を受けたサトゥルススによって仕組まれたものであった。この結果を受けて、テーセウスは First Mover としてのユーピテル (“The firste Moevere of the cause above” I. 2987, “Jupiter, the kyng,/ That is prince and cause of alle thyng” I. 3035-6) に呼びかける演説を行う。

この *KnT* における決定論的要素に触れて、Ann W. Astell は、この話において許される自由は “to ‘make vertu of necessitee’” ということだけだ、と述べている⁸⁾。Wedel が指摘するように、占星学を語る際に、チャーサーは人間の自由意志を強調することによってキリスト教の教義に反していないことを示すという安全策をとっていない。しかし、チャーサーのように多くの書物に接していた作家であれば、自由意志に関する当時の議論を知らないはずはない⁹⁾。チャーサーはこの作品で天体が人間の運命に与える影響を劇的に描いたが、アリストテレス (Aristotle) の宇宙観、自然学を神学と融合させる上での議論をまったく無視しているわけではない。自然哲学の議論それ自体を物語の中で劇化していることに注目すべきである。

2. 偶然と運命

この作品において提示される議論の一つに運命と偶然に関する議論がある。7年間の獄中生活に耐えてきたパラモンは、ついに行動を起こす。その脱獄の場面を語る時、話し手は、パラモンが脱獄を決意した

動機、その日を選んだ理由については明らかにしない。そして、「偶然」“aventure”か「運命」“destiny”のいずれかが原因でパラモンは牢を破ったのだ、と言う——“Were it by aventure or destyne - /As, whan a thyng is shapen, it shal be - /That soone after the midnight Palamoun,/By helping of a freend, brak his prisoun/And fleeth the citee faste as he may go.” (I. 1465-1469)。“As, whan a thyng is shapen, it shal be”というのは、決定論的であるが、同時に話し手は「偶然」と「運命」とを出来事の原因を示す概念として対立的に並置している。

アリストテレスは『自然論』(*Physics*)において、「偶然」を自然哲学の問題として論じたが¹⁰⁾、その議論は後世に大きな影響力を持った。ボエティウス(Boethius)は『哲学の慰め』*The Consolation of Philosophy*において、神の摂理を論ずる際にこの問題を取り上げ、アリストテレスの議論を引用し、意図しなかったことが何らかの原因によって起きることが偶然である、として偶然の存在を認めている¹¹⁾。アリストテレス注解者であるイスラムの哲学者アヴィセンナ(Avicenna, 980-1037)とアヴェロエス(Averroes, 1126-98)もまた、自然哲学の文脈において偶然という問題を決定論との関係において論じている。「偶然」が問題とされるのは、それが自然の因果律に断絶をもたらす可能性を持ち、決定論に対する反証となり得るからである¹²⁾。つまり、偶然は自由意志と同様、決定論を論ずるときに重要な概念であった。アヴィセンナによれば、地上界での出来事は天体によって支配されるものであり、偶然と思われるものも予見されたもので、人間の意志といえども運命を免れることは出来ない。したがって、アヴィセンナの宇宙は運命論的、決定論的で、偶然の存在する余地はない。それに対し、トマス・アクイナス(Thomas Aquinas)は偶然の余地を認め、偶然の意味する非決定論は自然におけるスパイスであるとした¹³⁾。

チョーサーは、トマス・アクイナスと同様に偶然の存在を認めることで、非決定論の立場を支持していると考えられる。上述したように、パラモンとアルシーテの森での出会いは、それぞれがお互いに意図せずにして

出会った、偶然の出来事として描かれている。それによって、二人の騎士の物語は非決定論の要素を取り込んでいる。騎士が巡礼の中で第一番に話をするようになったのも、偶然による出来事だったのかもしれない——
 “Were it by aventure, or sort, or cas,/ The soothe is this: the cut fil to the
 Knyght…” (“The General Prologue” l. 844-45)。偶然というテーマはすでに「序詞」において示唆され、*KnT*に受け継がれている。

「運命」と「偶然」との対置は「商人の話」“The Merchant Tale”にもみられ、そこでは、「行為」には何らかの原因があるという考え方が、より明確な形で示されている。

Were it by destynnee or by aventure,
 Were it by influence or by nature,
 Or constellacion, that in swich estaat
 The hevene stood that tyme fortunaat
 Was for to putte a bille of Venus werkes—
 For alle thyng hath tyme, as seyn thise clerkes—
 To any woman for to gete hire love,
 I kan nat seye; but grete God above,
 That knoweth that noon act is causelees,
 He deme of al, for I wole holde my pees. (IV. 1967-1976)

原因の冒頭に来るのは、運命と偶然とである。その後には「天体の感能力や自然力、星位」などが原因 (causes) として挙げられ、中世的自然観が簡潔な形で述べられている。人間や動物に内在し、それを動かす力としての自然によるものか (“by nature”), 宇宙という自然からの影響によるものか、いずれにしても人間は自然の力によって動かされている。そのように考えるとき、絶対的決定論に陥らないためには偶然の存在が必要である。そのため、神があらゆることを判断されるという決定論的結論を述べる前

に、話し手は偶然の可能性を示唆している。

すでに述べたように、占星学に関して論ずるとき重要な問題として自由意志の問題がある。KnTの話し手は“*Homo sapiens dominatur astris*”という言葉を用いることはなかったが、以下の引用では、星の影響が及ぶのは人間の“appetites”の部分である、ということを描いてそれに代えている。そして、人間が欲望に従っている部分、意思以外の部分については天上界によって支配されるということが、その後にかかる具体例によって示されることになる。

The destine, minister general,
That executeth in the world over al
The purveiaunce that God hath seyn biforn,
So strong it is that, though the world had sworn
The contrarie of a thyng by ye or nay,
Yet somtyme it shal fallen on a day
That falleth nat eft withinne a thousand yeer.
For certainly, oure appetites heer,
Be it of were, or pees, or hate, or love
Al is this reuled by the sighte above. (I. 1663-72)

偉大な統治者として描かれるテーセウスも運命の力を免れることはできない。それは、彼が、戦争にせよ、狩りにせよ、欲望に従って動いているからである。『テセイダ』ではこの場面は偶然の出来事として描かれているが、チャーサーはLoveとWarというこの話の中心テーマを欲望の一つとして数え、それに対する運命の力の大きさを強調している。二つの出会いの場面を一方は偶然として、他方を運命として描くことによって、運命と偶然というテーマが強調されている。

3. 自然と人間

天上界とそれによって影響される地上界の生き物、この物質的世界（自然界）への理解が中世西洋における占星学受容の前提としてあった¹⁴⁾。チョーサーは同時代の詩人の中でも自然科学への関心が強く、文学以外の分野で『アストロラーベ論』*A Treatise on the Astrolabe*のような科学技術に関わる書まで著している。天文学的現象への言及が文学的作品の中にも散見される。しかし、チョーサーの文学作品における自然への関心は、物質的世界の向こうに存在する何かに向けられており、その思索は自然哲学の領域に向けられていた。その意味では、同時代の自然に対する姿勢を超えるものではなかった。

すでに述べたように、*KnT*は森を舞台に展開する。その理由の一つは、この作品のテーマの一つである自然を語るのにふさわしい場所であったからだと考えられる。テーセウスはアルシーテの葬儀をどこで行うか迷った末、“Ther as he hadde his amoureuse desires,/ His compleynte, and for love his hoote fires…” (I. 2861-62)として森をその場所と決定した。そして、葬式の準備には多くの木々を倒す必要があったとして木々の名前が21種類に渡って挙げられる (“ook, firre, birch, aspe, alder, holm, popler …whippeltree” I. 2921-3)。その森には獣や鳥たちも棲みついていた (“… the beestes and the brides alle/ Fledden for fere, whan the wode was falle.” I. 1929-30)。高木が倒された後には、地面は明るい太陽に照らされて驚く。このような現代的意味での自然の様子に言及することで、作中人物は木や花、動物といった地上界の人間以外の生物の一部として位置づけられている。“…nature hath nat taken his bigynnyng/ Of no partie or cantel of a thyng,/ But of a thyng that parfit is and stable,/ Descendynge so til it be corrupable.” (I. 3007-10)と説くテーセウスは、“Loo the ook, that hath so long a norisshynge/ From tyme that it first bigynneth to sprynge,/ And hath so long a lif, as we may see,/ Yet at the laste wasted is

the tree.” (I. 3017-20) と、話し手が言及した樹木リストからその最初にある “ook” を例に挙げた。森における葬儀準備の描写は、テーセウスの演説の伏線と見ることができる。

地上の生物の一員としての人間という認識は、人間と他の動物との差異という問題認識にもつながる。パラモンは囚われの身の不幸について、罪もなく苦難に耐えていることの不運を訴えるとき、“What governance is in this prescience,/ That giltelees tormenteth innocence?” (I. 1313-14) と疑問を投げかけ、さらに、他の動物と比較して人間が不利な立場であることを指摘する——“And yet encesseth this al my penaunce,/ That man is bounden to this observaunce,/ For Goddes sake, to letten of his wille,/ Ther as a beest may al his lust fulfillle./ And whan a beest is deed he hath no peyne;/ But man after his deeth moot wepe and pleyne,/ Though in this world he have care and wo.” (I. 1315-21)。結局、この疑問に対する答えは神学者に委ねられる。チャーサーはこのような哲学的問題に答えを出すことはない。アルシーテの靈魂が行き着く先について語ったときも、語り手は “His spirit changed hous and went ther,/ As I cam nevere, I kan nat tellen wher./ Therefore I stynte; I nam no divinistre.” (I. 2809-11) と述べて、自分が神学者ではないことを強調する。トロイルスの靈魂が “the eighth sere” (TC, V. 1809) に昇ったことを告げる『トロイルスとクリセイデ』の語り手とは異なり、*KnT* の話し手は慎重である。チャーサーはこのように哲学的問題を持ち出したときに、自分にはそれに答える力量がないと言って他者の議論に譲ってしまう。しかし、そのことがすなわち哲学への関心の薄さを示すものではない。

占星学への言及が多い『トロイルスとクリセイデ』の結びにおいて、チャーサーは “O moral Gower, this book I directe/ To the and to the, philosophical Stode,/ To vouchen sauf, ther nede is, to correcte,/ Of youre benignites and zeles goode.” (TC, V. 1856-59) とチャーサーと文学的環境を共有していたと思われる二人に呼びかけている。ストローデは 14 世

紀英国における天文学研究の中心を担っていたオックスフォード大学マートン学寮のフェローであった。John H. Fisher は、チョーサーが彼の援助を受けて、天文学的知識を得られるようになったのだと推測している¹⁵⁾。しかし、チョーサーは科学者としてではなく「哲学的な」ストローデに作品を捧げている。つまり、『トロイルスとクリセイデ』に関しては、哲学的議論こそチョーサーの関心であった。そして、それは、*KnT* の場合も同様である。

4. 結

KnT において描かれる地上世界はサトゥルヌスの支配下にある。作中人物たちは自分の意志を明確に表そうとせず、天体によって決められた運命に不平を言いながらも、天体の影響力を信じ、それに従おうとする。しかし、作品によって示されるのは決定論ではなく、偶然の可能性を残した非決定論である。チョーサーは天体の影響する範囲を示すなど、自由意志と運命との関係についても示唆している。テーセウスが作品の最後において呼びかけるのが自然界、宇宙全体を支配するものとしてのユーピテルであるように、*KnT* のテーマは自然である。テーセウスの演説が唐突に聞こえないのは、作品において自然世界の一部としての動植物、その延長線上にある人間という位置づけがあるからである。『カンタベリー物語』の最初の話である *KnT* は、自然、宇宙観、神の摂理と運命など哲学的テーマを導入する役割を担っている。そのような哲学的問題は、チョーサーとその読者が興味・関心を共有する問題であった。

注

- 1) チョーサーの作品からの引用は全て *The Riverside Chaucer*, ed. Larry D. Benson (Houghton Mifflin Company, 1987) に拠る。
- 2) *The Book of Theseus: Teseida delle Nozze d'Emilia* by Giovanni Boccaccio, Tr. Bernadette Marie McCoy (New York: Medieval Text Association, 1974), V. 9-36.

- 3) *Dante's Christian Astrology* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1994), p.9.
- 4) *Ibid.*, 243.
- 5) *Ibid.*, p.246.
- 6) Jennifer R. Goodman, "Nature as Destiny in Troilus and Criseyde," *Style*; Fall 1997;31,3 (North Illinois University Department of English), 419.
- 7) Astell 前掲書 p. 102 参照。また, W. Lilly, *A facsimile edition of Christian Astrology* (Regulus, 1985), P.60 には, "Saturune" について, "He delights in Deserts, Woods, obscure Vallies, Caves, Dens, Holes, Mountaines, or where men have been buried, Church-yards, &c. Ruinous Buildings, Colemines, Sinks, Dirty or Stinking Muddy Places, Wells and Houses of Offices, &c." という記述がある。また, "Jupiter" の項には "He dilighteth in or neer Altars of Churches, in publick Conentions, Synods, Conbocations, in Places neat, Sweet, in Wardrobes, Courts of Justice, Oratorie." (p.64) とあり, 二者がそれぞれふさわしい場所に配置されていることが分かる。
- 8) *Chaucer and the Universe of Learning* (Ithaca & London: Cornell University Press,1996), p.96.
- 9) Theodore Otto Wedel, *Medieval Attitude Toward Astrology: Particularly in England* (New Haven: Yale University Press, 1920), pp.146-148.
- 10) *Physics*, II iv-v. Aristotle, *The Physics: Books I-IV* with an English Translation by Philip H. Wicksteed and Francis M. Cornford, (Loeb Classical Library, Harvard University Press, 2005) pp. 139-155.
- 11) *The Consolation of Philosophy*, Book V. i. 35-58.
- 12) Catarina Belo, *Chance and Determinism in Avicenna and Averroes* (Leiden& Boston: Brill, 2007), p. 17.
- 13) James A. Wisheipl, O. P., "Aristotle's Concept of Nature: Avicenna and Aquinas" in *Approaches to Nature in the Middle Ages* (New York: Center for Medieval & Early Renaissance Studies, 1982), pp. 137-160.
- 14) 中世後期における自然と自然哲学については, Roger French & Andrew Cunningham, *Before Science: The Invention of the Friars' Natural Philosophy* (Hants: Scholar Press, 1996) がある。特に, 第4章 (pp.70-98) "Nature before the friars" 参照。
- 15) *The Importance of Chaucer* (Southern Illinois University Press, 1992), p. 67.

Synopsis

Nature and Chance in “The Knight’s Tale”

Junko Asakawa

Chaucer believed, as Dante did, that God’s will was shown through Nature. In “The Knight’s Tale” he dramatizes astral influences on human beings. It is Phoebus that leads Emelye to the garden to “walketh up and down”(I. 1052), which starts the story of love and war. Phoebus also guides Arcite to the forest where he meets Palamon and fights with him. The characters in “The Knight’s Tale” rarely express their own will. Instead, they are conscious and accept that the seven planets control their fate: Arcite attributes his captivity to Saturnus. Astrological determinism implied in “The Knight’s Tale”, however, is limited by the existence of chance: In Chaucer’s tale the fatal reunion of Arcite and Palamon was realized by chance. Chance is a topic discussed in relation to nature and determinism.

For Aristotle, chance is an event which is not intended by any nature. Avicenna, an interpreter of Aristotelian philosophy, believed that there was no room for chance and the free will of man in the physical world. On the other hand, Thomas Aquinas regarded the indeterminism of chance as a spice of nature. Chaucer apparently follows Thomas to suggest a possibility for earthly beings to escape all-embracing determinism and partly break natural causality. Most events of “The Knight’s Tale” happen in the grove

which birds and animals inhabit surrounded by various trees. Chaucer gives detailed description of earthly life in order to define human beings as a part of it. Palamon complains that while animals can fulfill their lusts human beings must abstain from them and have pain even beyond the grave. The narrator confesses he does not know where the spirit of Arcite will go. These philosophical problems are raised and left to be considered by Chaucer's audience.